え？どうしてここでアート？in東北

アーティストがある地域に一定期間滞在したり、通ったりしてリサーチ・制作するという試みは、もはや一般的と言っていい。東北のあちこちでも、国内外のアーティストやコーディネーターが、背景の異なる地域に関わり、活動している。今号では、地域に関わる2名の方に現場を互いに視察し、寄稿していただいた。あわせてもう1名に、国際的なアーティスト・イン・レジデンスに取り組む視点からの考察を依頼した。

必ずしも地域の理解を得られるものでもなく、多くの集客を見込むのも難しそうな現場の前線で、いったいどのようなことを目論み、仕掛け、葛藤しているのか。有り体な価値観から離れ、果敢に取り組む彼／彼女らは、「え？どうしてここでアート？」の先に何を見ているのだろう。

Katsurao Collective

——アートは「資源」となり得るか？

市川寛也

村立葛尾中学校の校庭にて喜多村の作品を囲んで談話中

施設情報

福島県双葉郡葛尾村
落合菅ノ又14－2
（葛尾村立葛尾中学校校舎内）
office@katsurao-collective.com

福島県葛尾（かつらお）村―失礼ながら初めて耳にする自治体であった。改めて地図を見れば浪江町の西側に接している。浪江と言えば、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故に際し、報道を通して連日その地名を目にしていたことを思い出す。事故現場から北西に位置する葛尾村でも、全村民が避難を余儀なくされた。その後、2016年に帰還困難区域を除いて避難指示が解除され、2022年6月には特定復興再生拠点区域の避難指示も解除された。これをきっかけに、短期移住者としてアーティストやクリエイターを招聘（しょうへい）する「Katsurao AIR」が始まった。その担い手となっているのが「Katsurao Collective」である。

そもそも、なぜこの地域で「アート」なのだろうか。事業目的を概観すると、アーティストの活動をサポートすることで村に眠る資源や魅力を発掘することとある。では、アートを通じて発掘し得る資源とは何なのだろうか。訪問に先立ち、オンラインでディレクターの森健太郎と話をする中で、「葛尾村は一度リセットされた」という発言があった。筆者がフィールドとする岩手県金ケ崎町の場合、江戸時代から続く家が並び、住民の情念のようなものが土地に染みついている。その意味において、2つの地域は対照的だ。なんとなく比較の観点が浮かび上がってきたところで現地へ。

村に入るとところどころに「帰還困難」の文字があり、否応なく現実が垣間見える。そのままコレクティブの拠点となる村立葛尾中学校（休校中）に向かう。とある教室の黒板には「みんな帰ってくるぞ！また会おう！」というメッセージが2011年4月27日の日付のまま残される。これは作品を志向したものではないが、この場所の記憶を目に見える形であらわした「資源」に他ならない。果たしてこの村に訪れたアーティストは、どこに資源を見出すのだろうか。

2023年には、11名のアーティストがリサーチや制作に取り組んだ。個人的な話となるが、そのうちの一人である喜多村徹雄は、筆者の勤務する大学で研究室がとなり同士。昨年の夏に福島と何度も往復されていたが、その行先を再認識した。廊下で立ち話をした際には、葛尾村で「資源」を見出すことの難しさについて語られていた。喜多村の制作にあたっては、かつて旧住民と入植者が炭焼きなどを通じて関係を深めていった記録をもとに、人が集う「場」を設える構想が示された。校舎前の樹間に設置されたテーブルのようなものもその一環である。

地域の状況はやすやすと把握できるものではないが、作品を通してそれぞれのアーティストが見出した視点を共有することはできる。今回、現地を訪れた際には、「葛尾村復興交流館あぜりあ」にてKatsurao Collective 2023の活動報告展が開催されていた。例えば、杉浦藍の《草を編む》では、草刈りにスポットが当てられる。日本の夏の湿潤な気候は植物の生長に有利であり、人が手を入れ続けない限りすぐに自然に覆われてしまう。金ケ崎でも夏は草との不毛な闘いが続くが、ここでは草刈りの有無が治安の悪化にも直結するというもうひとつの問題をはらんでいるという。これはここに「住む」ことによって可視化された視点と言えよう。

野生の地域は、綺麗ごとだけで済むわけではなく、時に生々しい。それでも、人は誰しもどこかに住まなくてはいけない。AIRの試みは、その多様な住み方を仮設的に示したものと捉えることもできるだろう。そこでは、ここに誰かがいることそのものが既に「資源」なのである。道中では、コレクティブのメンバーである大山里奈が、カフェやギャラリーとして改装している現場の様子も見学させていただいた。一度リセットされたこの村で、再び根付き始めるものに着目したい。

（いちかわ・ひろや）
金ケ崎芸術大学校代表。群馬大学共同教育学部准教授。博士論文の研究の一環で2011年に訪れて以降、付かず離れず金ケ崎と関わり続けてきた。「城内農民芸術祭」の企画者の一人。

金ケ崎芸術大学校

——日々の営みの中にある創造

森健太郎

芸術大学校の内部

施設情報

岩手県胆沢郡金ケ崎町西根表小路9-2
〈旧菅原家（狩野家）侍住宅〉
kanegasakiartcollege@gmail.com

岩手県金ケ崎町には、かつて「要害」が設置されていた。江戸時代の仙台藩では、藩境に要害という拠点を置き、有事に備える独自の制度が存在した。要害は単なる軍事拠点だけではなく、町場・宿駅などの城下町としての機能も兼ね備えた経済の拠点でもあった。現在では、かつて要害と武家町のあった場所のほぼ全域が、金ケ崎町城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、小路に沿って整えられた生垣や、武家屋敷の大きな屋根など、住民たちがこの地の歴史を引き継ぎながら生活している。

金ケ崎芸術大学校は、そんな歴史ある町の一角で2018年から実施されている。江戸時代末期に建てられた古民家「旧菅原家侍住宅」を拠点としており、門壁には控えめに「金ケ崎芸術大学校」と書かれた木製看板が立っている。庭に入ると作家の村山修二郎氏の作品が設置されており、藁を使って造形されたその佇まいは、かつての武家屋敷だった住宅の庭に溶け込んでいるようだ。住宅の中には、これまでのイベントで住民が作った作品が飾ってある。玄関横には小さな駄菓子屋スペースがつくられており、近所の子供たちが放課後に遊びに来ると教えてくれた。金ケ崎芸術大学校では、アーティストによる創作やワークショップだけでなく、漆や藍染めのワークショップや盆栽、はにわづくりやプラモデルづくりまで、住民主体で数多くの取り組みが実施されている。

金ケ崎芸術大学校のプログラムは、その多くが住民の生活の延長線上にある。アートや創作を「自分たちとは違う特殊なもの」で終わらせずに生活の中に創造という行為を浸透させていこうという姿勢は、私が福島県葛尾村で実施しているKatsurao Collectiveとはアプローチの方法は違うものの、大いに共感できるものである。Katsurao Collectiveでは、アーティストやクリエイターがひとりの生活者として関係性を築いていくことを重視している。アート活動やアーティストという人々が地域の存在の一つとして認められることで、アートや文化も人々の生活の延長線上で継続していくことができると考えている。一方で金ケ崎芸術大学校は、人々の生活の中にある創造的な行為に眼を向けることで、日々の営みの中に美的経験があることを示す。これは宮沢賢治が『農民藝術概論要綱』で語った農民の日々の生活の中に、幸福や美を見出す姿や、哲学者の鶴見俊輔が『限界芸術論』で示した非専門的芸術家の活動の中に美的経験を見いだす姿勢にも近いものだ。安易なキッチュ論やニヒリズムに流れることなく、人々の暮らしや営みの中にある美的経験に真摯（しんし）に向き合うことは、先駆者の思想を現代的に解釈し実践する取り組みでもあり、現代の生活を通じて美的経験を語り直す極めてハードコアなプログラムに思える。

視察も終わり、近くの古民家レストランで昼食を食べていると、店主が「ここでは芸術大学校で作った器を使ってますよ」と話しかけてくれる。隣のテーブルの家族連れが「またワークショップに行きます」と声をかける。金ケ崎芸術大学校は、人々の生活の中にある美的行為や創造性を可視化していく。歴史ある地の一角で、人々の生活と創造をつなげる金ケ崎芸術大学校を視察し、岩手県の風土の中で宮沢賢治がかつて夢見た心の中の理想郷「イーハトーヴ」を思い起こした。

（もり・けんたろう）
福岡県出身。東京藝術大学院卒業。2022年5月よりKatsurao Collectiveディレクター。アーティストとして社会で合意・形成される“アート”に成立の仕方についてリサーチを行うかたわら、キュレーターとして活動。2020年「富士の山ビエンナーレ」ほかキュレーション多数。

アーティストがそこにいること、と地域の創造性

日沼禎子

アーティストと地域の創造性を支える場

日本におけるアーティスト・イン・レジデンス（以下、AIR）の近年の活況ぶりには目を見張るものがある。AIRとは端的にいえば、アーティストが自らの拠点を離れ、一定期間滞在しながら創作活動を行う場所、施設、あるいは仕組みである。そこでは創作のための時間と、スタジオなどの物理的な場が用意されているだけではなく、地域固有の文化（ひと・もの・こと）などとの出会いからインスピレーションを受け、新たな創作への糸口を見つけることができる。若手にとっては、未知の世界に触れ、自分の立ち位置を確認しながら、トライ＆エラーが許されるまたとない機会となる。中堅以上のベテランにとっても、さらなる探求を深める機会、あるいは次のフェイズに向かうための休息の場ともできるだろう。萌芽から成熟期へ向かう長い創作活動を支えるこうした仕組みは、アートの生態系、好循環を支えるエコシステムの役割としても捉えられ始めている。私がAIRの現場に携わるようになったのは1990年後半から2000年代初頭の、いわば日本におけるAIRの黎明期で、すでに社会的に認知されている美術館やギャラリーなどと比較し、アートシーンの中でも注目される機会は限られており、国や地方自治体の文化政策としての位置付けとしても未だ確立されてはいなかった。現在では、各地の芸術祭とも連動し、地域創生にとって必要不可欠なものとみなされている。そして、アーティストにとっても、かつての「選ばれし者」の場ではなく、「自らの意思で選ぶ」プラットフォームとして認識され始めている。

東北を拠点とした活動に目を向けると、AIRの意義やあり方が改めて注目され、少子高齢、過疎などの地域の状況や課題に対する呼応をはじめ、特に2011年の東日本大震災発災後の震災復興に向けた活動がいくつも立ち上がり、国内外のアーティストやデザイナーなど、クリエイターの滞在制作を受け入れるプログラムが数多く展開されている。いずれにせよ、共通するのは、旅行以上、定住以下の限定的な期間に「アーティストがそこに居る」ということだ。アーティストにとっては「なぜ、その地を選ぶのか」、そして運営者にとっては「なぜAIRでなくてはならないのか」という問いの中、試行錯誤を続けているだろう。

社会の皮膚をリメイキングする

AIRにとって重要な人物、美術家の故・浜田剛爾（※1）の存在について記したい。浜田氏は、2011年まで国際芸術センター青森（現：青森公立大学国際芸術センター青森、以下、ACAC）で初代館長を務め、美術、パフォーマンス、パブリックアート、デザイン、クラフトなど、領域横断的な数々の企画を実現させ、地域文化の振興と国際的なネットワーキングに大きく貢献した。筆者は、1999年の準備室開設時から2011年まで同学芸員を務め、AIRプログラムの企画運営、教育事業、広報などを担当し、国内外のアーティストとの刺激に満ちた12年間を過ごした。

浜田は1972年、ベルリンの壁でのパフォーマンス《嘆きの壁》を出発点とし、韓国、オーストラリア、ドイツ、カナダ、ポーランド等各地を巡るなど、日本におけるパフォーマンス・アートのパイオニアとして知られてきた。彼が精力的に活動してきた同時代のアーティストは、海外での国際展やシンポジウムなどに参加する機会も増えたことにより、インターナショナルスタイルを獲得するための、より実験的で新しい表現を希求した。あわせて、そうした表現を受け止める、美術館やギャラリーを超えたオルタナティヴな場を求めていた。画壇などの組織に属することなく、インディペンデントに世界を自由に移動しながら表現の場を獲得できるAIRは、アーティストにとって大きな憧れと希望であった。浜田にとってACACに携わることは、自分を受け止めてくれた世界中のAIRと、アーティストの仲間たちへの恩返しなのだとよく語っていた。世界をめぐるアーティストとAIRの意義について、多くの言葉を残した浜田だが、筆者がACACの最後の仕事として行ったロングインタビューの中から、一部抜粋して紹介する。まるで今日の時代を予言するかのような興味深い言葉である。

「社会はhappyな状態ではないということは事実で、駄目になりかけている皮膚を、もう1回リメイキングする必要があるのではないか。犠牲は多いけれども、AIRはまだそのことを言える権利があるし、もっとさまざまな方法論を試す必要があって、ACACのAIRがはたしてその役割を担うことができるかを、社会に再度リプレゼンテーションできるのなら、できる限り早くやったほうがいい。崩壊と立ち上げを繰り返すことによって、初めて生きる知恵が蓄積されるように。（中略）世界は24時間動き続き、戦争もあり、いろいろな物事が動いている。アーティストとの移動と人々との交流の中で、新しい地図が生まれる。そして僕らは世界を眺め漂うパイロットの目になる。AIRはそうした場、役割になればいいのではないか。」（※2）

今、この時に生きるアーティストは何をリプレゼンテーションするのだろう。私は彼の言葉を胸に刻み、AIRにできること何かを今も考え続けている。

陸前高田AIR―新たなAIRへの挑戦

2013年より、筆者も、東日本大震災により甚大な被害を受けた陸前高田市を拠点に「陸前高田アーティスト・イン・レジデンスプログラム」（※3）を立ち上げた。きっかけは、発災直後に受け取ったACACの歴代のレジデントアーティストからのメッセージ、「日本のために何かできないか？」という要請からだった。地震、津波により人命、そして多くのものを失った街で、これからもこの地で暮らしていく人々に寄り添いながら、アーティストの滞在活動を通し、この地に根ざす文化を読み解き、人々との交流の軌跡を記録、表現することで「記憶の風景」を紡ぎだし、未来を想像し、創造するための種を作り出す試みである。これまでにアルメニア、インドネシア、ウェールズ、オランダ、タイ、ドイツ、ラトビア、フィリピン、日本から、アーティスト、キュレーターが滞在し、自然環境、日々の暮らし、古くから伝わる文化などへのリサーチと人々との交流を主軸とした活動を行ってきた。滞在プログラム終了後は、東京や横浜をはじめとし、アーティストの各国の拠点でも成果を発表し、展覧会、トークショー、ダンス公演、芸術祭への参加を通し、その成果を次のフェイズへと繋げる活動を行ってきた。2020年のパンデミック禍においては、リモートでのAIRにも取り組んだ。それは、各国でステイホームを余儀なくされているアーティストも陸前高田の人々も、孤立することなく、つながりを持ち続けるための苦肉の策だった。こうして経年とともに変わりゆく被災地と、国際的な状況とを注意深く観察しながら、アーティストと地域の双方に対して何ができるのかを自らに問いかけ、事業を継続している。気がつけば10年もの月日が経ち、関わったアーティストたち、そして私にとってもかけがえのない場所、もうひとつの「Home」になっている。

そして未来に向けて

大規模な自然災害、ウイルスによるパンデミック、そして国際的な紛争が今も続いている。そうした中で改めてAIRのエッセンシャルとは何かを考えてみる。「国際性と地域性」「グローカル」「イノベーション」「インキュベーション」「サステイナブル」「ダイバーシティ」「エコシステム」「レジリエンス」など多くのキーワード、そして期待される姿がある。時代が変わっても、常にAIRはアーティストにとってのオルタナティヴな活動を受け止めてきた。「アーティストがそこにいる」ことによる違和感、異文化との出会いによって、まるで古い皮膚が剥がれ再生するかのように、自らの足元にある事実や価値を再発見する。人間にとって大切なものとは何か、より良く生きるとは何かを自ら問うとき、日々の生活と創造とが分かち難く存在することへの気づきを、AIRは与え続けてくれるのだろう。

※1　はまだ・ごうじ、1944年青森市生まれ。1968年東京藝術大学彫刻科卒業。日本の「パフォーマンス・アート」のパイオニアとして世界中で活躍し、各国のAIRに参加。また、各種アートプログラムや国際展のプロデューサーを務めるほか、北方少数民族のウイルタ族や、カナダ、オーストラリアの先住民の芸術研究を行った。2016年逝去。
http://hikuiyama.com/goji-hamada/J-html/index-j.html

※2　『AC2（エー・シー・ドゥ）No.12』（発行：青森公立大学国際芸術センター青森、2011年）

※3　http://rikuzentakataair.com/

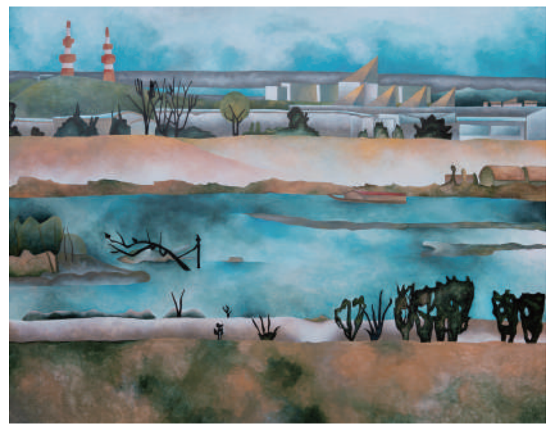
陸前高田AIRプログラム「気仙：アートとライフをここに持ち寄る」（三陸国際芸術祭 三陸×アジア「つながる」プロジェクト参加プログラム｜2019年）

（ひぬま・ていこ）
女子美術大学教授、陸前高田AIRプログラムディレクター、AIRネットワークジャパン事務局。2011年まで国際芸術センター青森［ACAC］学芸員を務め、2013年より陸前高田AIRプログラムを立ち上げる。「さいたまトリエンナーレ2016」ではプロジェクトディレクターを務める。

JOURNAL GALLERY

毎号アーティストをピックアップしてご紹介します

大きい橋



アクリル、キャンバス　910×1167 mm（F50号）　2023年

大きな橋、川、電波塔、流木や尖った建物が描かれている。例えば、絵画にまつわる1つの問いとして、それらの組み合わせが風景であることはどうしてわかるのか、という問題がある。「絵画」の存在については、歴史や認知、記憶、社会etc…、様々な概念の中で問われてきた。「美術作品を作る」ことを、モチーフの探求では無く「ハードを開発する」ことと捉えたおおだいらにとって、本作の「風景」は、鑑賞者ごとに異なるであろう「絵画」との距離を測る、もの差しのごとく機能しているように見える。

おおだいらまこ

1995年青森県生まれ。尾道市立大学大学院美術研究科美術専攻絵画研究分野（油画）修了。「絵画作品と鑑賞者を含めた展示空間」をテーマに制作を行う。絵画の枠組みを拡張することで絵画を再定義し、絵画作品ひいては美術作品の親しみやすさを探っている。主な展覧会に、個展「ホワイトバランス」(ギャラリークレイドル・青森市/2022)、公募展「第22回グラフィック「1_WALL」展」(ガーディアン・ガーデン・銀座／ 2020)。個展「∩頂天-ｳﾁｮｳﾃﾝ」を、2024年7月2日（火）～14日（日）ギャラリーターンアラウンド（仙台市）にて開催予定。

デコレータークラブ

飯川雄大

DECORATOR CRAB
デコレータークラブ
飯川雄大

飯川の取り組んできた一連のシリーズ「デコレータークラブ」、そして仙台で実現できなかったアートプロジェクトの軌跡を追った一冊。

発行日：2023年3月下旬（予定）
発行：せんだいメディアテーク、株式会社赤々舎
予定価格：5,500円（税込）

JOURNAL

アートノード　ジャーナル11号　2024年２月23日発行
編集長　甲斐賢治（せんだいメディアテーク）
編集　田中千秋、丹治圭蔵、齋藤さくら（せんだいメディアテーク）
デザイン　佐藤豊
印刷　株式会社ソノベ

お問い合わせ・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1 ／ TEL: 022-713-4483
E-mail: artnode@smt.city.sendai.jp ／ URL: https://www.smt.jp

アートノードとは、「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」に多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台に創出する事業です。
本紙ジャーナルは、アートノードの進捗を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。
※「アートノード」は「せんだい・アート・ノード・プロジェクト」の略称です。

せんだいメディアテーク sendai mediatheque | art node

© 2024 sendai mediatheque All Rights Reserved.
本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。この用紙はリサイクルできます。